

「地図大国ニツボン」は こうして作られた

序論

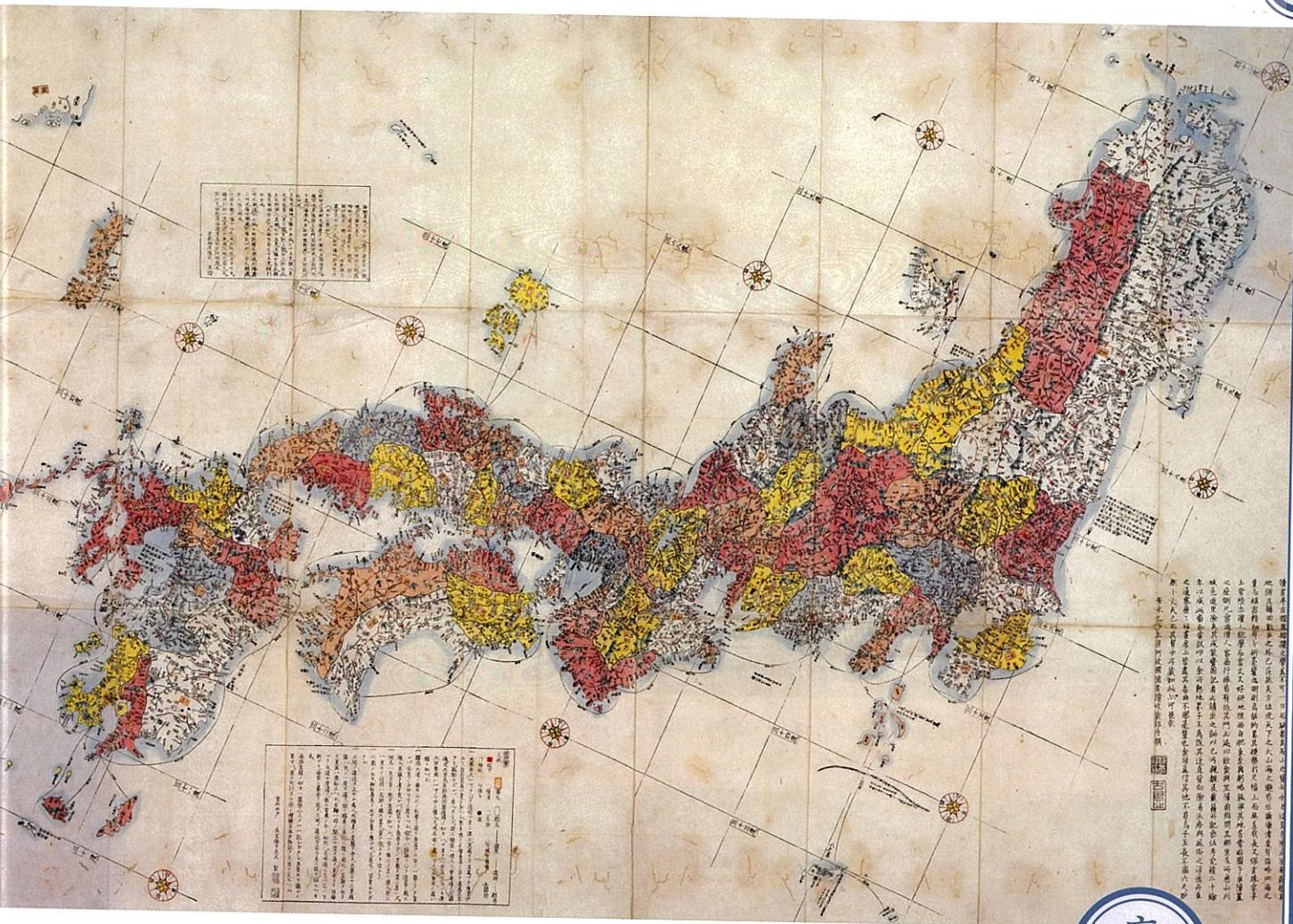
↑長久保赤水『改正日本輿地路程全図』第二版(重文、高萩市歴史民俗資料館蔵)。赤水が75歳(1791年)で完成させた地図(縦約83×横約130cm)。初版(1779年)より詳細だ。



●解説 今尾恵介さん
(地図研究家・64歳)

小野田一幸さん
(神戸市立博物館学芸課長・58歳)

◀昭和34年生まれ。日本地図センター客員研究員。小学生より地形図と時刻表を愛好。近著に『地図帳の深読み「地図記号のひみつ」』、『日本古地図コレクション』。



日本の地図の発展史

年代	出来事
646年(飛鳥)	朝廷が「国郡圖の調進の詔」を出し、各地に地図を作らせる。
738年(奈良)	聖武天皇が諸国に国郡圖の作成を命じる。
1305年(鎌倉)	現存する日本最古の「行基圖」が作られる(西日本の一部、欠け)。
14世紀半ば(室町)	本州から九州までの全域が記載された「行基圖」(「日本扶桑國之圖」)が作られる。
1491年(安土桃山)	秀吉、全國の國繪圖と御前帳(檢地帳)の作成・提出を命じる。この頃、「扇面三國圖」(21ページ)ができる。
1570年(戦国)	近代的地図帳「世界の舞台」(14ページ)が欧州で刊行。天正遣欧少年使節によって日本にもたらされ、豊臣秀吉に献上されたと伝わる。
1591年(安土桃山)	石川流宣の道中図「日本海山潮陸圖」(18ページ)が初めて刊行される(百科事典「拾芥抄」に掲載)。
1607年(江戸)	石川流宣の道中図「日本海山潮陸圖」(18ページ)の作製が始まる。
1687年(江戸)	平賀源内がこの頃、志度焼を指導し、地図(20ページ)を刊行。『赤水日本図』と呼ばれ、以後約90年もの間、再版され続けた。
1755年(江戸)	長久保赤水、緯線と縮尺などを記した「改正日本輿地路程全図」(12ページ)を刊行。赤水没後も版を重ね、日本地図のベストセラーに。
1779年(江戸)	伊能忠敬の『蝦夷地の実測』を始める。その後、全国を測量(14ページ)。この頃、鉢形蕙斎の鳥瞰図「日本名所の絵」(17ページ)刊行。
1800年(江戸)	シーボルトが、伊能忠敬の「大日本輿地全図」の縮図を国外に持ちだそうとしたことが発覚、国外追放される(シーボルト事件)。
1828年(江戸)	國土地理院の前身「民部官庶務司戸籍地図掛」が設置される。
1869年(明治)	森鷗外が格子状の線を引いた「東京方眼図」(22ページ)を考案し、刊行。
1909年(明治)	吉田初三郎が鳥瞰図地図を発表。観光ブームも手伝い、初三郎の絵地図(16ページ)は旅行案内や名所図に採用され、「大正の広重」と称される。関東大震災が起きる。寺田寅彦ら科学者が現地調査に入り、「火災動態地図」やレポートにまとめられた(23ページ)。
1941年(昭和)	太平洋戦争開戦。地形図類の一般への販売が停止される。
1981年(昭和)	世界初のカーナビゲーションシステムが日本で誕生。90年にはGPS(衛星測位システム)カーナビも生まれる。
2005年(平成)	スマートフォンが普及。スマホで地図を調べることが当たり前に。
2009年(平成)	デジタルデータの「電子国土基本図」を日本の基本図として採用。
2023年(令和)	法務省の登記所備付地図データが、無償で一般公開される。

世界の見方が地図に出る

そもそも「文字より前に地図は生まれた」といわれるほど、地図の歴史は古い。発見されている最古の例は、紀元前1500年頃、イタリア・カモニカ渓谷の岩壁に描かれた集落図。自分たちの把握する世界を、地図として表現したものだ。

「現存する日本最古の地図は、「行基圖」(15ページ)と呼ばれる

ものです。年号がわかるいちばん古いものが、1305年(嘉元3)が発行している5万分の1や2万5000分の1地形図も、隠れたベストセラーといえます」

では、日本の地図の歴史はいつ始まるのか。

『図説 日本国古地図コレクション』の共著者でもある小野田一幸さんは、「日本地図の歴史はいつ始まるのか」。

「図説 日本国古地図コレクション」によれば、文献に見える最も早い地図作成の記録は、「国郡圖の調進の詔」だという。「大化の革新で律令制が導入されますが、國家統治には土地の把握が必要です。朝廷は、各地に地図を作るよう命令を出します」

この時の地図は残っていないが、地図で、形は不正確です。どの国と隣接しているかわかれれば良かつたのでしょうか(小野田さん)」

地図には、「世界をどう把握しているか」が表現される。日本は、16世紀中頃にヨーロッパと接触するが、それ以前の「世界觀」は、中国、天竺(インド)、日本の3国しかなかった。

「イタリアに派遣された天正遣欧少年使節(1582~90年)は、同地で近代的地図帳の「世界の舞台」を入手し、持ち帰ったといわれています。同書は、秀吉に献上されたとも伝わります。また伝説の域ですが、織田信長は地球儀を有していたともいいます」(同前)

「権力者や知識層だけが持つていてこうした「地図」の情報は、江戸時代、出版物によって庶民に広まっていく。

「地図は情報としてだけでなく、江戸時代にはお皿などの工芸品のデザインとして用いられるようになりました」(同前)

地図で世界を知り、かつ地図そのものを愛する。日本人は、地図を楽しむ達人だったのです。